

ミステリ読書案内

2024. 2. 8 発行元

第550号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

中・高校生にお薦めの本^{その}27

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の27回目。第510号そして第530号に引き続いて講談社から出版された『ミステリーランド』シリーズから4冊を選んでみた。能登半島地震について少し…。

能登半島地震について思う

1月1日に「能登半島地震」が起きた。(この原稿は1月中旬に書いている) 能登半島は私が大学四年生の時、地質調査で歩いた懐かしい場所。そこが大地震に見舞われ、震度7になるとは…。かつて歩いた場所が崖崩れの連続になっているのを見ると…。

今から50年近く前の夏、輪島から能登半島先端の狼煙まで一週間くらいの時間をかけて調査をしながら歩いた。輪島付近の海岸のト

ンネルもくぐったし、曾々木海岸、窓岩、垂水の滝も見た。上時国家にも入ったし、当時はまだ柳田村と言っていた町の旅館にも泊まった。

地質調査をするには能登半島は非常に興味深い場所で、火山噴出物でできた海岸、グリーンタフ(緑色凝灰岩)の崖、新生代第三紀の地層と化石の数々…見どころ満載だった。切り開かれたばかりの切通しには地層の褶曲や断層が見られ、大きな力が加わって出来上がったことを感じさせる場所だった。(以下、第554号に続く)

有栖川有栖『虹果て村の秘密』

2003年の第2回配本。扉を開くと「虹果て村」の地図が書いてある。主人公は十二歳の少年・上月秀介。父親は刑事なのだけでも、秀介は推理作家を目指している。刑事になりたい少女・二宮優希と共に優希の母親の生まれ故郷の「虹果て村」に夏休み旅行に出掛ける。優希の母親は推理作家の二宮ミサト。列車を降り、迎えに来た従姉の車に乗って村に入る。村では高速道路建設に賛成・反対の争いが…。「夜に虹が出たら人が死ぬ」の言い伝え通りに殺人事件が発生。しかも密室状態の中で…。そして、土砂崩れが起きて、村の中に閉じ込められた二人は知恵を絞って謎に挑戦することに。本格謎解きの形式。

小野不由美『くらのかみ』

2003年の第1回配本。作者の小野不由美は壮大なファンタジー『十二国記』シリーズが代表作。本書はホラー仕立てのミステリ。謎解き要素もある。

後継者選びのために本家に集められた親戚たち。その中の四人の子どもたちは蔵座敷に遊びに出掛ける。真っ暗な部屋の中で「四人ゲーム」。四隅に一人ずつ配置して、最初の一人が壁伝いに移動して次の隅にいた人にタッチ。タッチされた人は次の隅に向かい…。普通に考えれば最初の人が出た隅には誰もいないはずなのに、なぜかグルグル回り。いつの間にか四人が五人になっていた。増えたのは座敷童子？ その後、毒殺事件に…。少年探偵団の活躍は？？

我孫子武丸『眠り姫とバンパイア』

2011年の第17回配本。小学五年生の相原優希は居眠りすることが多い女の子で「眠り姫」と呼ばれていた。冒頭。夜プリント学習に取り組んでいた優希はいつの間にかうとうと。すると窓をコツコツ叩く音がして窓の外にパパが立っていた。普段、母親と二人暮らしでパパは…という場面になっている。学習の遅れを心配した母が家庭教師を頼んでくれた。最初について美沙先生はアメリカ留学へ。その後を引きついた荻野歩実先生に出会ってみるとその人は…。パパがどうして家にいないのか…。夜目の前に現れたのは本物のパパなのか…。優希は歩実先生と相談しながら謎に踏み込んでいく。

高田崇史『鬼神伝・鬼の巻』

2004年の第3回配本。本書の後、すぐにこのシリーズで『神の巻』が出て、2010年には別の形で『龍の巻』という続編が書かれている。京都の中学校に転校してきたばかりの天童純が主人公。内気な性格でいじめっ子の争いごとに巻き込まれないよう走って逃げたら小さな寺・不仁王寺に迷い込んでしまった。そこで出会った源雲という僧侶と鬼について話し合っているうちに、純は平安時代にタイムスリップしてしまった。

時間移動のショックから立ち直った純の前に現れたのは都を守る源頼光。純は鬼退治の役目を担うことになっていく。鉄の檻に閉じ込められていた雄龍霊=オロチの遣い手となりいざ出発。「龍年」の今年に相応しい内容。最初は「鬼は悪者」と思い込んでいたのが、いくつかの出会いの中で疑問にも思えてくる。「鬼」とは何かもストーリーの中に含めながら話は展開していく。高田崇史は平安時代を中心にした歴史ミステリを得意としているので本書もその流れで上手に描けている。